東北お遍路
TOHOKU OHENRO

第二回 東北お遍路写真コンテスト
第一回 東北お遍路俳句コンテスト
作品集

東北お遍路俳句コンテスト選考委員

俳句

金子 兜太 氏

黒田 杏子 氏

夏井 いつき 氏

東北お遍路写真コンテスト選考委員

写真

青柳 健二 氏／齋藤 康一 氏／結城 登美雄 氏

東北お遍路巡礼地について

東北お遍路プロジェクトは、２０１１年３月11日に発生した東日本大震災により、被害を受けた福島県いわき市から青森県八戸市までの沿岸地域に、慰霊と鎮魂の道を作ろうと、２０１１年９月に発足しました。四国遍路が１３００㎞あるのに対し、リアス式の海岸をゆく東北お遍路は１７００㎞の道のりとなります。

２０１２年には「千年先までも語り継ぎたい津波の被災地」を公募。以来、集まってきた候補地を３年かけてメンバーが現地を訪問して検証しました。こうして絞り込まれた１０５ヵ所の候補地を、有識者による創生委員会を経て、２０１５年２月に53ヵ所の「東北お遍路巡礼地」として発表し、翌年に10ヵ所を追加、現在63ヵ所になっております。

東北は幾度も津波の悲劇に見舞われましたが、今回の大災害を経てあらためて思うことは、「語り継ぐことが、最大の防災である」ということです。

そこで東北お遍路プロジェクトは、千年先まで語り継ぎたい物語を見出して「こころのみちの物語」として発信する活動をしております。また被災地の「今」を切り取る「東北お遍路写真コンテスト」と「東北お遍路俳句コンテスト」を、震災の記憶を風化させないための大切な取り組みのひとつにしていくとともに、被災地への誘客という復興に欠かせない大切な役割も担っていきたいと考えています。

やがて民族や宗教を越えた多くの方々に巡礼地を辿って頂くことにより、東北の海岸線に一本の祈りの道ができれば、辛くても前向きに生きた私たちの震災の記憶が、千年先にも語り継がれていくことでしょう。

今後も、東北お遍路プロジェクトは、東北の各被災地が連携して、経済的・文化的に自立・発展できる復興の一助となるよう、活動を続けてまいります。

一般社団法人東北お遍路プロジェクト代表・新妻 香織

第２回 東北お遍路写真コンテスト ／ 第１回 東北お遍路俳句コンテスト

２０１７年４～８月に第２回東北お遍路写真コンテストと第１回東北お遍路俳句コンテストの募集をしましたところ、北海道から沖縄まで、写真の部に44名１５４点、俳句の部に２５７名１２９２句のご応募をいただきました。どうもありがとうございました。

今回はテーマを写真、俳句とも「東北お遍路巡礼地にまつわるもの」といたしました。実は東北お遍路はようやく巡礼地が63ヵ所定まったところで、時期尚早かと心配しましたが、実際に被災地に足を運ばれてシャッターを押し、あるいは句を詠んだ様子がしっかり伝わる多くの作品に出合えたことは、コンテストを主催する者には大変うれしいことでした。

写真は９月27日、審査員４名、斎藤 康一氏（写真家）、青柳 健二氏（写真家）、結城 登美雄氏（民俗研究家・東北お遍路創生委員）、新妻 香織（東北お遍路プロジェクト代表）が仙台市に会し、厳正なる審査を行いました。

一方、俳句コンテストを今回初めて開催するにあたり、予算もあまりなく、投句料も頂かないコンテストゆえ、選者をどうするかは頭の痛い問題でした。30年以上前の細い縁を頼って黒田杏子氏にお電話を差し上げたところ、選者を快諾頂くだけでなく、金子兜太氏、夏井いつき氏にもおつなぎ下さり、考えられないような豪華な顔ぶれでコンテストを開催できましたことは、東北お遍路にとって大変名誉なことでありました。また被災地で家族や学友を亡くした人も多い福島県立新地高校が全校で参加下さったことも、私たちには大切な機会となりました。

今後、東北お遍路写真・俳句コンテストは、立派な応援団を得て、ますます盛り上がりをみせていくことでしょう。次回も皆様のご参加をお待ち申し上げております。

目次

第１回俳句コンテスト作品
金子 兜太 選 ［入選15句］ 4
黒田 杏子 選 ［入選15句］ 6
夏井 いつき 選 ［入選15句］ 8
応募作品百句 10

第２回写真コンテスト作品
審査員講評［最優秀・優秀賞］ 14
佳作作品 18
当選者発表 19

金子 兜太 氏 選評

臨場感のある、言い換えれば存在感のある句が多く感心した。実際に現地を訪ね、吟行したりして作品化したと思われる句に出合えたこと、これはすばらしかった。十五句それぞれに味わいと見どころがあり、天・地・人などの順位を付ける必要もなかったように思う。

このような俳句大会を企画された人々の情熱に敬意を表する。この大会に選者として参加できたことは百歳に向かう俳人の私に勇気と希望を与えてもらったことであり、主催者に感謝している。

天

渚みな玉石ばかり盆の波　鈴木 睦子（岩手県盛岡市 81歳）

地

福島をフクシマと呼び原発忌　堀川 卓郎（福島県いわき市）

人

野遊びの子に飴やって遍路行く　関口 芳男（栃木県日光市 59歳）

盆休みひさい地訪れ死者思う　荒 大和（福島県新地町 16歳）

この花火観ていてほしい亡き人も　海老沢 法導（宮城県仙台市）

入選

青嵐高き梢に残るブイ　佐藤 雅子（岩手県盛岡市 73歳）

月命日の捜索の舟山背吹く　大信田 宏子（岩手県滝沢市 69歳）

桜見て見知らぬ人に見送られ　半田 真理（栃木県宇都宮市）

潮焼の松川浦の若漁師　渡部 健（千葉県多古町 63歳）

御霊来よ浄土ヶ浜は秋の凪　田代 フサエ（群馬県伊勢崎市 83歳）

みちのくや風にちぎれて鉦叩　齋藤 伸光（宮城県仙台市）

ただ海を見つめ黙礼巡礼地　松原 美幸（北海道札幌市）

海原の続きは地面椿東風　中島 理子（岩手県盛岡市）

海霧や丸き石積み供養唄　阿部 ゆき子（岩手県盛岡市）

慰霊碑にあの人みつけ野菊供え　新妻 徳善（福島県相馬市 87歳）

黒田 杏子 氏 選評

天

避難所はとても寒くてこわかった　山崎 有姫（福島県新地町 16歳）

忘れることの出来ない記憶。それを作品にして提出して下さったこと、感動しました。寒くてこわかった。これは一生忘れられない言葉です。

地

瑞巌寺さまの毛虫にまづ会ひぬ　近藤 愛（愛知県名古屋市 44歳）

名古屋から松島に来られたようですね。名高い瑞巌寺に辿りついて、まず出会ったのが毛虫。実に愉しい句です。その毛虫の色や大きさ忘れませんね一生。

人

にぎりめし一つは海へ二十日盆　木村 燿子（岩手県盛岡市 83歳）

海底に眠る方たちに、持参のおにぎりを一つ沈める。二十日盆の季語がとても効いています。死者と生者が共におにぎりを介して結ばれているようです。

帰らぬ子に更地なれども盆の路　合田 マサル（大阪府堺市 78歳）

普通は草を刈って、盆路をととのえるのですが、その海辺一帯更地で草一本見当たらない。しかし、戻ってくる子のために、やはり盆の路を作らないではいられない。心に沁みる一行です。

松植ゑて祈ることまた願ふこと　松本 利幸（山口県光市 68歳）

山口の方がはるばるみちのくへ。海原と松。こののちの歳月を想って、また松の木を植える。その植樹には祈りがあり、願いがこめられていると…。

入選

五度の春経て吾子の顎骨いま帰る　桑原 秀美（福島県郡山市）

津波よりのがれし人に燕来る　宮沢 歌子（栃木県小山市 77歳）

みちのくの大きマスクの秋遍路　菅谷 英美子（北海道帯広市 75歳）

津波跡佇む夏の遍路かな　竹内 生子（愛媛県松山市 66歳）

被災地の海を旅する花の束　及川 和山（岩手県遠野市 91歳）

逝きし者花屑となりみんなゐる　高村 龍彦（宮城県大和町 65歳）

七年目の稲の香重機音絶えず　林 美佐子（宮城県仙台市 78歳）

水漬きたりし町よ大漁旗炎ゆる　二階堂 光江（岩手県盛岡市 63歳）

土用波小さきちいさき献花台　佐野 享保（宮城県大崎市 69歳）

お遍路のお国言葉や赤のまま　村田 加寿子（青森県八戸市 66歳）

夏井 いつき 氏 選評

天

逝きし者花屑となりみんなゐる　高村 龍彦（宮城県大和町 65歳）

亡くなった方々を花のころに想われる句ですね。今は姿も形もないのだけれど、一人一人が足元に集われているかのようだと。季語が「落花」の傍題「花屑」であることも想いを深くします。

地

瑞巌寺さまの毛虫にまづ会ひぬ　近藤 愛（愛知県名古屋市 44歳）

「さま」としたところに瑞巌寺への尊崇の念が現れています。出迎えてくれる一匹の毛虫にも親しみと尊さを感じる。これから参道を奥へ奥へと辿る作者の歩みも表現されています。

人

海の底に月花の奥にも月の満ち　半田 真理（栃木県宇都宮市）

海の底から咲き乱れる花の奥へも月が輝いている光景には、亡くなられた方と生きているものへの温かい眼差しが溢れています。「満ち」が想いを溢れさしていますね。

陽炎の中に手が見ゆ手を合はす　太田 すなほ（埼玉県さいたま市）

ゆらめく陽炎に一瞬見えたかのような誰かの手でしょう。出来ればその手を握り引き戻したいという衝動に駆られたのか。静けさの中に合わす祈りの手です。

秋つばめここまで水が来ましたよ　梅田 昌孝（愛知県名古屋市 64歳）

なんと率直な言葉でしょうか。同行の誰かに囁いているのか、或いは、秋の燕に囁いているのか。秋の燕は来年もここに帰ってくるのです。

入選

案内図に遺る教会つくつくし　佐野 享保（宮城県大崎市 69歳）

ガラス無き校舎は黒し春の雨　松下 洋介（大阪府和泉市 73歳）

八千貫の津波巨石や雁来紅　石橋 いろり（東京都小平市 58歳）

新任地は女川役場夏日向　厨 恵子（埼玉県所沢市 67歳）

ここ遺体安置所跡地夏の蝶　迪方 温峇（神奈川県横浜市 40歳）

白蝶やしづけさの百三十段　久保田 聡（神奈川県川崎市）

蕪島祭神楽に怒涛せまりくる　小笠原 聖子（青森県八戸市 77歳）

防潮堤高し盛夏の沖しづか　池添 怜子（宮城県仙台市 78歳）

小鳥来る月命日の津波の碑　曽根 新五郎（東京都新島村 62歳）

雪が降り青かった海を黒くする　櫻井 亜海（福島県相馬市 15歳）

応募作品百句

■北海道

津波きて目ざめて判る原爆忌　木下 將人
ずたずたの校舎遺構と萩すすき　松原 美幸
月今宵ひとり二人と送り終え　松原 美幸

■青森

日雷ひたすら逃げろ津波の碑　鈴木 莉花（76歳）
社なき蕪嶋照らす秋の月　鈴木 洋子（74歳）

■秋田

ありがたい大地に足をつけて夏　熊谷 順子（65歳）
半夏生観音様の目は涼し　小松 紀子（66歳）

■岩手

風紋と震災遺構夏果てぬ　豊島 喜美子（61歳）
森までも削り取りたる海晩夏　豊島 喜美子（61歳）
電車来ない駅舎となりぬ曼珠沙華　菊池 留美子（69歳）
生身魂戦争のこと地震のこと　木村 燿子（83歳）
月見草灯し浜辺の供花とす　藤田 美江（77歳）
生きてさへいれば真夏の湾歪む　二階堂 光江（63歳）
老鶯や瓦礫閉じ込む展望台　菊地 十音（82歳）
浜蘭や疎開せし家あった道　南 その子（70歳）
名月や一本松と人達と　及川 リウ子（78歳）
秋遍路訪ねて拝む久慈ケルン　松谷 柚子坊（75歳）
亡き人の顔雲になり海に舞う　笹谷 由夫（71歳）
悔しさを感謝に変える遍路道　南部 努
三陸や共に歩もう春の雪　海老沢 法導
三月の海へ鐘突く日和山　小野寺 雅美
畏友帰れみちびき地蔵に手を引かれ　佐々木 三太郎（73歳）
蝉時雨石段に海かえりみる　佐藤 涼子
月命日日和山より海拝む　片山 白梅（64歳）
津波襲う普誓寺に永眠る祖父母らも　片山 白梅（64歳）
新涼の碧き潮あび五大堂　金子 カナ子（82歳）
蕪嶋の大鳥居にもやませ来ぬ　菅原 耕（66歳）

■山形

■宮城

はじめての遠足むこうの干潟まで　山 あつ子（62歳）
錆きつた避難手すりに盆の月　林 美佐子（78歳）
防潮堤の中に寺あり梅の咲く　山内 伸一（73歳）
被災地の浜街道や萩の花　高橋 幸子（85歳）
遍路みち巡礼してみる東北で　武田 良子（75歳）
道路の見聞重ね遍路かな　笹谷 由夫（71歳）
夏の海蘇生のピアノ鳴りにけり　八島 敏（71歳）
新酒酌む酔えば八戸小唄かな　安達 英雄（76歳）
春霙鎮魂の音に地が芽吹き　渡邉 里弥（36歳）
あっけなく遺品かたづく朧月　齋藤 伸光
夕桜ふたたび逢えぬ人の夢　川村 聰（74歳）
ひっそりと勿来の関や蝉時雨　高橋 さとか（67歳）
時雨忌の沖の明るき瑞巌寺　山本 一史（79歳）
山門を潜る母娘の遍路杖　富樫 文子（93歳）
わが家には二度ともどれぬこのつらさ　庄子 源六（80歳）
龍の目や白砂青松今いずこ　木村 きよみ（92歳）
初雲雀かすかに海の慰霊の碑　渡辺 みつ子（67歳）
慰霊碑にひざまづくかな揚雲雀　佐藤 和子（74歳）
刻まれし名の尊さよ春立ちて　佐藤 和子（74歳）
楼門の七番札所法師蝉　西内 俊和（71歳）
事故炉建つ軍用地跡敗戦日　三瓶 美月（75歳）
寄せ仏百を数えし冬日かな　松井 和子（69歳）
村ひとつ津波に呑まれ揚雲雀　小林 久美子（68歳）
長堤の途切れ一浦沖朧　高木 悠悠（86歳）
母と娘と白砂をたどる虹二重　杉本 田鶴子（65歳）
原発のいじめなくそう全国に　櫻井 尚哉（16歳）
なき人に想いを語る灯篭流し　佐藤 優希（16歳）
蛍飛び一つの光追いかけた　伏見 若菜（16歳）
盆の夜に集まる鎮魂なつかしむ　荒 竜誠（15歳）

■福島

東北お遍路俳句コンテスト

■新潟

あつすぎるアクアマリンに行ってくる　星野 祐樹（15歳）
震災は二度とこないでお願いだ　藤田 遥香（16歳）
高い波街も笑顔も連れ去って　青田 穂乃華（15歳）
夜桜の静まり返る星の数　東 宏斗（16歳）
年重ねあの日の事は忘れずに　佐藤 楓華（16歳）
どこにいる君を探して海の中　齋藤 志帆（17歳）
雪とけてふと思い出す六年前　今村 あゆ美（17歳）
大波に洗われし故里蝉時雨　新谷 公男（67歳）
山百合や勿来の関に句碑多し　吉川 穣
夏霧に覆われて立つ塩屋崎　岡村 昱生
隧道にぽつんぽつんと春氷　織田 亮太郎
大熊の海山川よ鰯雲　佐藤 香澄（67歳）
夜は美しきものよ相馬の盆踊　佐藤 香澄（67歳）

■茨城

転勤のふくしま浪江父の春　木村 誠一（79歳）
福島の復興祈願去年今年　木村 誠一（79歳）
月天心奇蹟の一本松も独り　井坂 南瑞子（77歳）
尋ね来て野山もみどり安堵する　三橋 昭子（90歳）

■栃木

閖上の漁港に求む夏のジャコ　鈴木 美江子（78歳）

■東京

天辺の石に石積む雲の峰　曽根 新五郎（62歳）
初旅の末の松山宝国寺　曽根 新五郎（62歳）
悲しみに想い馳せるは芽吹く松　若槻 泰治
ひばりさん歌声永久に春岬　渡辺 行子（72歳）
みちのくへ巡礼に出る夏期休暇　永井 潮（80歳）
水澄みてウミネコの声聞く大樹　石橋 いろり（58歳）
海猫の子の遊ぶ石段蕪の島　あんぽ ふみこ（69歳）
みちのくのお遍路めざす雲雀かな　阿部 正（62歳）
村は大人の声ばかり遍路道　窪田 惠子（72歳）
秋ふかし松島守りし小島達　古山 智也子（81歳）

■千葉

秋の潮堤防細き線を描き　木寺 洋子（62歳）
うみねこも我も命の一つのみ　齋藤 理津子（38歳）
波越さぬ末の松山秋の月　安田 清一
原発や夏草茂る請戸浜　渡部 健（63歳）

■埼玉

被災地の海の青さよ蛇苺　増田 信雄（79歳）
行けど海行けど山々遍路道　太田 すなほ
月よみの光にねまる秋遍路　太田 すなほ
短冊に願ひさまざま星涼し　厨 惠子（67歳）
待たるるは浜のみちのく秋遍路　矢部 保雄（65歳）

■神奈川

みちのくの女遍路の日傘かな　穴澤 秋彦（61歳）
春雷や松を龍へと変へし波　久保田 聡
遍路杖馴染みし頃ぞ鰯雲　二藤 覺（80歳）

■静岡

原発も核も要らずと原爆忌　幅 茂

■愛知

しばらくは秋蝶についていきます　梅田 昌孝（64歳）
天瓜粉匂はす老女遍路道　山野 拓郎
震災後東北の方おげんきで　川崎 喜久江（79歳）
物言わぬ龍の松あり盆の月　有瀬 こうこ
命日の同じ卒塔婆や涅槃西風　有瀬 こうこ
眼裏にありフクシマの夏祭　有瀬 こうこ
震災の大地に立ちて祈る秋　河田 祐一（79歳）
友四人言葉少なく春遍路　松下 洋介（73歳）
行く年や平凡すぎるありがたさ　松下 洋介（73歳）
気仙沼復興市場日の盛り　日下部 君代（73歳）
一本松生れし松原遍路道　和田 千明
母に似る老女のなまり余花の寺　森本 美和（72歳）
みちのくや千年先も蝉時雨　木俵 奈美（55歳）
手を合はすみちびき地蔵蝉時雨　木俵 奈美（55歳）
鎮魂の遍路の旅でありしかな　竹内 生子（66歳）
除夜の鐘祈り千年中尊寺　田島 直人（50歳）

■三重

■和歌山

■高知

■愛媛

■熊本

第二回

東北お遍路写真コンテスト

審査員講評

❖ 齋藤 康一〔写真家〕

東北お遍路プロジェクトの写真コンテストは、昨年は「東北全般」を対象に写真を集め、今年の第2回は「東北お遍路にまつわる写真」に限定しましたが、幅広く作品が集まり、遜色なかったように思います。作品のレベルも上がって来ていて、故郷の現状が伝わるものが多く見受けられました。さらなる作品の出品をお待ちしております。

❖ 青柳 健二〔写真家〕

今年より昨年の方が全般的に明るい雰囲気の写真が多かったような気がする。昨年は「復興」「未来」「希望」というキーワードを「忖度」してしまったのか（応募者も審査員も）、祭りとか景観のやたら明るい写真が多くなった感は否めない。それと比べると、今年はむしろ落ち着いてきた印象だ。日常をたんたんと切り取るという意味では、コンテストとして少し成熟したのかもしれない。それと被写体の絞り込みは、意識をもって撮影している応募者が多くなったせいか、写真のレベルも上がったような気がする。これも審査員一同、同じように感じたことだった。

❖ 結城 登美雄〔民俗研究家／東北お遍路創生委員〕

今回の応募作品からは、7年経った被災地の今の視点が見られました。農・漁業の復活がどの人の目にも見えてきて、被災地にようやく生業が復活してきたことを感じます。里に芸能が彩りを添え、石碑にも心が向いているようです。それぞれの作品は「今の祈りの形」が切り取られていて、遺族や近親者の思い、子どもたちの思いを見ることができたように思います。みなさんがシャッターを押した瞬間の心をコメントとして聞いてみたいものです。

最優秀賞

柏舘 健

『復興願いて』 福島県浪江町請戸漁港付近

【齋藤】

震災以来、6年を経てしまった現在でも、未だにこのような状況を見、ここに暮らした方々を想うと、胸が痛みます。しかしながら、この画面の青空はそれを払い除けてしまう感じも致します。作品としてのまとまりが大変よく、何か心に響く感じがいたしました。

【青柳】

一見すると、震災直後の写真かなと思われる荒れた土地の写真なのだが、実は、これは福島県浪江町請戸漁港近くで今年2月に撮影されたものと聞くと、突然心がざわつき始める。6年経っても、こんな状態であることを知って、なんとも言えない気持ちになってしまうのだ。しかも供えられた花は枯れていて、ここが頻繁に訪ねられていないことをも物語る。被災地の現実を、ストレートに撮影した作品だが、写真を撮るということは、現場に自分が実際に行くことだ、ということもあらためて感じさせる。それこそ、巡礼地を自分の足でめぐってもらいたいというお遍路プロジェクトの思いと通じるところがある。

第二回 東北お遍路写真コンテスト

優秀賞

小檜山 裕行
『祈り』
宮城・岩沼

【齋藤】
この人は何を祈っているのでしょうか。神前において祈るこの人物の雰囲気を画面上に非常にうまく活かし、とても整った画面作りをしたものと感心致しました。

【青柳】
青年は地元の被災者なのか、他所から来た旅人なのかはわからない。しかし、青年が指先をピンと伸ばし脇に添えた手の様子から、タイトルの「祈り」は強烈に感じられる。まだ見つからない犠牲者が早く身内の元へ帰れるように祈っているのだろうか、そんな想像もしてしまう。それは写真が持っている物語性だ。客観的な状況を、個人的な物語へといざなう写真のすばらしさはここにもある。どれだけ想像させるか、あるいは、物語を生み出せるか、ということもある。画面全体が黒く締まっていて緊張感を与え、「祈り」の凛とした雰囲気を漂わせる。

優秀賞

大岸 泰
『龍神と龍凧』
宮城・気仙沼

【齋藤】
光の扱いが良く、右側のモニュメントとそれに対して左側の連凧の上がり具合がとても良く、全体が開けている感じがして、気持ちの良い作品に仕上がっていると思いました。

【青柳】
岩井崎の海岸は風が強く波が怖く感じるほどだ。津波にも耐え、波風に立ち向かうように龍の松が立っている。この力強さは被災者を勇気づけただろう。しかし、行ってみるとわかるが、意外と龍の姿に見える角度は決まっていて、どこからでも龍に見えるわけではない。そもそも、この龍の姿がわからないと、「龍神と龍凧」というタイトルの意味もわからなくなるので、龍に見えるアングルは重要だ。作者は、ちゃんと髭がなびいた龍の姿を捉えている。そして面白いと思うのは、天に伸びていく凧が右側の龍の尾にも見えて、ふたつが一体になっている点だ。

優秀賞

相沢 開
『華の万灯・朱雀連』
宮城・塩釜

【齋藤】
真正面から撮った神輿、フレーミングが良く、女性たちの笑顔もとても良い。明るい明るい感じの祭り。復興しつつある街を象徴している雰囲気があるように思いました。

【青柳】
塩竈みなと祭での、万灯みこしの急勾配階段上りのシーンだろうか。担ぎ上げるのは大変だがここがハイライトでもある。技術的にもしっかりした写真で、望遠レンズを使って主題を浮き上がらせ、若干、下の方の観客たちも見えている。みこしと観客をすべて入れ、少し引いた写真になっていたら、説明的になってしまい、ここまでの迫力は半減していただろう。女性たちの表情がよくわかる切り取ったアングルは、かえって祭りの盛り上がりと熱気を感じさせる。また画面構成も、上が赤、下が白の対比が印象に残る。

第二回 東北お遍路写真コンテスト

佳作

佐々木均
『甦った田んぼ』
宮城・東松島

佐藤 賢
『おいしいよー！』
宮城・女川

渡邊 興次
『平和を願って』
宮城・東松島

中村 輝一
『釣石神社の奇跡』
宮城・石巻

門林 泰志郎
『中作ふたりの吊るし雛まつり』福島・小名浜

鈴木 久雄
『流転』
宮城・山元

高橋 こうけん
『防潮柵の中を復旧したおみこしが…』宮城・山元

村上 哲夫
『魚食べてけろ!!』
福島・新地

庄子 源六
『雄勝法印神楽』
宮城・仙台

庭野 陽子
『鎮魂の水供養』
福島・いわき

東北お遍路写真コンテスト・俳句コンテスト当選者発表

【最優秀賞】

仙台牛ギフト券3万円分＋東北お遍路ガイドブック

● 写真の部

柏舘 健 様

● 俳句の部

近藤 愛 様

【優秀賞】

南三陸町山内鮮魚店の旬のもの1万円分＋東北お遍路ガイドブック

● 写真の部

小檜山 裕行 様／大岸 泰 様／相沢 開 様

● 俳句の部

高村 龍彦 様／鈴木 睦子 様／半田 真理 様

【佳作】

会津ご自慢の詰め合わせ　5000円分＋東北お遍路ガイドブック

● 写真の部

庄子 源六 様／渡邊 興次 様／門林 泰志郎 様／中村 輝一 様
佐々木 均 様／鈴木 久雄 様／高橋 こうけん 様／村上 哲夫 様
佐藤 賢 様／庭野 陽子 様

● 俳句の部

梅田 昌孝 様／木村 燿子 様／関口 芳男 様／佐藤 雅子 様
荒 大和 様／佐野 享保 様／曽根 新五郎 様／渡部 健 様
合田 マサル 様／宮沢 歌子 様

【入選】

東北お遍路ガイドブック

● 写真の部

村上 淳 様／矢部 珠美 様／吉田 宏 様／大森 文暁 様／高橋 成尚 様
山口 恒弥 様／大橋 政博 様／西條 きみ子 様／小林 赳直 様
後藤 博 様／礒崎 孝男 様／川村 裕信 様／山本 正彦 様／佐藤 裕 様
大谷 真宏 様／佐藤 義博 様／佐藤 昭夫 様／丹野 寛志 様
鹿糠 清次 様／佐藤 笑美子 様／阿部 豊 様／藤島 純七 様
守屋 正安 様／桑原 秀美 様／鈴木 昌典 様／清水 克己 様
宮崎 遼 様／カマタニ ヒサト 様／原田雅博 様／村上 正嗣 様

● 俳句の部

堀川 卓郎 様／海老沢 法導 様／大信田 宏子 様／半田 真理 様
田代 フサエ 様／齋藤 伸光 様／松原 美幸 様／中島 理子 様
阿部 ゆき子 様／新妻 徳善 様／山崎 有姫 様／松本利幸 様
桑原 秀美 様／萱谷 英美 様／竹内 生子 様／及川 和山 様
林 美佐子 様／二階堂 光江 様／佐野 享保 様／村田 加寿子 様
太田 すなほ 様／松下 洋介 様／石橋 いろり 様／厨 恵子 様
迪方 温峇 様／久保田 聡 様／小笠原 聖子 様／池添 怜子 様
櫻井 亜海 様／川崎 喜久江 様／八島 敏 様／佐藤 香澄 様

東北お遍路
TOHOKU OHENRO

「第2回東北お遍路写真コンテスト・第1回東北お遍路俳句コンテスト作品集」

初版発行：2017年11月22日
編集・発行：一般社団法人東北お遍路プロジェクト
仙台市太白区長町三丁目9−10(エフエムたいはく内)　☎022-717-5805
URL http://touhoku-ohenro.jp　E-mail info@touhoku-ohenro.jp
©Touhoku ohenro contest 2017　無断転載禁止